

# 児童・青年はどのように泣いている友達に反応するのか —— 悲しみの泣きと嬉し泣きの比較 ——

高橋 実里<sup>1)</sup>・中道 圭人<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 千葉大学グローバルプロミネント研究基幹 (教育学部)・特任研究員

<sup>2)</sup> 千葉大学・教育学部

How do people respond to crying peers in childhood and adolescence?

: Comparison between crying of sadness and crying of happiness.

TAKAHASHI Minori<sup>1)</sup>, NAKAMICHI Keito<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Institute for Global Prominent Research, Chiba University

<sup>2)</sup> Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究は、泣いている他者に対する行動について検討した。小学4年生、中学1年生、成人の計185名（男性79名、女性106名）に、状況が異なる3つの泣きの場面（悲しみ泣き・達成の泣き・再会の泣き）に直面した際、自分が友達に対して行う行動について自由記述での回答を求めた。その結果、ポジティブな状況である達成の泣きに対しては「共感・称賛」、再会の泣きに対しては「共感・称賛」と「見守り」といった行動が多かった。また、他者の泣きへの行動は、小学4年生では一貫して表出的であったが、成人では状況にあわせて選択的に非表出的の行動を行っていた。本研究より、ポジティブな理由による泣きに対する行動には、小・中学生と成人の間に発達の違いがあり、主に成人では他者が泣いている理由の違いは、行動に大きく影響していることが示唆された。

This study examined people's behavior to a crying peer. Participants ( $N=185$ ) were 10- and 13-year-olds, and adults. They were asked what behavior to a crying peer, in 3 crying stories (crying of sadness, crying of achievement, crying of meeting again) by a questionnaire. The results showed that 10- and 13-year-olds were more likely than adults to generate the express behaviors such as "empathy" and "praise" for the crying stories with achievement or meeting again; adults generated the covert behaviors such as "watching" and "no involvement" for these stories. Also, 10-year-olds consistently generated the express behaviors for three crying stories; in contrast, adults adjusted their behaviors to suit the reason for crying. These results suggested the possibility that the behaviors towards the other crying with positive emotions keeps changing from 10-years-olds to adults.

キーワード：泣き (Crying), 向社会的行動 (Pro-social behavior), 児童期 (Childhood), 青年期 (Adolescence)

## 問題・目的

ヒトは、生まれながらに他者に対する向社会的な傾向を持つ (e.g., 鹿子木, 2014; Tomasello, 2009/2013; Warneken & Tomasello, 2006)。例えば、マーカーを落として困っている他者が目の前にいれば、18か月児でさえマーカーを拾って手渡す (Warneken & Tomasello, 2006)。このように、ヒトは他者が困っている状態にある際に、その他者に協力したり、何かを分与したり、手助けするといった向社会的な行動を行う。

とりわけ、他者が泣いている状況は向社会的な行動を誘発しやすい (Eisenberg & Mussen, 1989/1991; Farver & Branstetter, 1994; Hasson, 2009; Hendriks, Croon, & Vingerhoest, 2008; 加藤・大西・金澤・日野林・南, 2012; 久保, 2007; 溝川, 2009)。例えば、Hendrik et al. (2008) は青年期-老年期の成人 ( $M=44.6$  歳, 範囲=17-84歳) を対象に、ある他者がネガティブ

な状況 (例: 車で事故に遭ってしまった) やポジティブな状況 (例: 大きなスピーチをやり遂げた) に直面する物語を提示し、その他者に対してどのような行動を行うかを尋ねた。また、それぞれの物語には、その他者が泣いていない場合と、泣いている場合があった。その結果、同じ状況でも、その他者が泣いていない場合より、泣いている場合に「慰める」「励ます」といった情動的な援助行動を行う傾向が強くなり、その他者に「腹を立てる」といったネガティブ情動表出を行う傾向が弱くなった。つまり、ネガティブな状況でもポジティブな状況でも、他者の泣いている状況が向社会的な行動を促進させることが示された。

Hendriks et al. (2008) では、泣きに対する行動を「情動的な援助 (例: 慰める, 励ます, 助ける)」「ポジティブな注意 (例: 声をかける, 注意を払う)」「ネガティブな情動表出 (例: 腹を立てる)」の3つに分類し、他者に対する直接的な行動のみを扱っていた。しかし、ヒトは泣いている他者に対して直接的な行動だけを行うわけではない。例えば、「見守る」「そっとしておく」といっ

連絡先著者：高橋実里：m-takahashi@chiba-u.jp

た、目には見えないが他者を想って選択された意図的に行動・援助を抑制する「非表出的な向社会的行動」も行う(満野・三浦, 2010; 小川, 2014; 山村, 2013, 2017; 山村・中谷, 2012)。例えば, 山村(2017)は小学4・6年生, 大学生を対象に, 友達が校舎の陰で泣いている場面での最適な行動を「直接的行動(すぐ声をかける)」「間接的行動(先生や友達を呼んでくる)」「非表出的行動(そっとしておく)」から選択させた。その結果, 「非表出的行動」を選択する人数は, 小学4年生で2割, 6年生で4割, 大学生で6割以上となった。このように, 児童期から青年期にかけて, 泣いている他者への非表出的な行動がみられるようになる。

この非表出的な向社会的行動は, 表出的な向社会的行動以上に, 他者の視点取得や行動の結果を予測する能力などを必要とする行動である。例えば, 満野・三浦(2010)は大学生を対象に, 泣いている友達を「あえて慰めない」場合の理由を質問紙で尋ねた。その結果, 「泣いている他者を自分が慰めることで相手が傷つく(ネガティブ情動が強まる)」という予測を持つために, 大学生は「あえて慰めない」行動を選択していた。このため, 非表出的な行動の発現や生起には, 心の理論などの社会的認知の発達に関わっていると考えられる。

また, 泣きの状況にあわせて選択的に非表出的な行動を行えることは, 児童期から青年期において相手との良好な関係構築・維持のために重要となる。例えば, 澤田・松尾・橋本(2012)は成人看護師(M=34.6歳, 範囲=22-58歳)を対象に, 一人で泣いた状況と, 他者が傍にいて泣いた状況での, 泣くことによる情動状態の変化を評定させた。その結果, 他者が傍にいた状況では「恥ずかしい」「周りの人を困らせたと感じた」などの否定的な評価が高くなった。一方で, 他者が傍にいた状況より, 一人で泣いた状況では「すっきりした」「落ち着いた」などの解放・安堵の評価が高くなった。このことから, 泣きの状況にあわせて選択的に非表出的行動を行うことが, 相手の自尊心を保護することに繋がり, 結果として他者との関係を良好に保つことになると考えられる。

以上のような先行研究から, 泣きはヒトの向社会的な行動を誘発すること, また, 中学生頃までには4割程が泣いている他者に対して「あえて慰めない」という非表出的行動も行えるようになることが示された。しかしながら, 次のような疑問も残っている。まず, 泣きはネガティブな理由だけでなく, ポジティブな理由でも生じうるが, その理由に関わらずヒトは泣きに対して非表出的行動をするのだろうか。また, 仮に成人が泣いている他

者の状況にあわせて, 表出的行動と非表出的行動を使い分けるとすれば, そのような使い分けはいつ頃から生じるのだろうか。

これらの疑問について検討するため, 本研究では小学4年生, 中学1年生, 成人(大学生・社会人)を対象に, 状況の異なる泣きに対する行動を尋ねる質問紙調査を行った。日常生活でヒトが泣く状況は様々であるが, ポジティブな理由による泣きはその困窮性の低さからあまり扱われてこなかった。本研究において, 泣きに対する行動の小学生から成人にかけての発達的变化を明らかにすることは, 「他者が泣いている」という, 特に情動的な社会的相互作用に関する社会的認知の発達に関わる新たな知見を提供できると考える。

## 方法

### 参加者

公立小学校に通う小学4年生67名(M=122.42か月, SD=3.36), 公立中学校に通う中学1年生65名(M=157.52か月, SD=3.45), 大学生あるいは社会人の成人60名(M=19.77歳, SD=1.99)が調査に参加した。質問紙の回答に不備のあった7名(小学生女子1名, 中学生男子2名, 大学生女子4名)を除き, 最終的に分析の対象となったのは4年生66名(男子36名, 女子30名), 中学生63名(男子31名, 女子32名), 成人56名(男性12名, 女性44名)の計185名(男子79名, 女子106名)であった。

### 材料

泣いている他者に対する行動を調べるための質問紙を作成した。質問紙は全2ページで, 表紙には調査内容や倫理的配慮(調査協力は任意であること, 成績等には関係がないこと, 等)の説明を記し, 次のページに, 状況が異なる3つの泣きの物語とその泣きに対する行動質問を記載した。3つの物語は, (1)「友達と離れることが悲しくて泣いている(悲しみ泣き)」, (2)「練習の成果を発揮できて嬉しくて泣いている(達成の泣き)」, (3)「会いたかった人に再会して嬉しくて泣いている(再会の泣き)」であった(Table 1)。それぞれの物語を説明する文章に続き, 「もし友達がこのような状況で泣いていたら, あなたはどうしますか」という質問と, 質問に対する自由回答欄を記載した。泣きの物語の提示順は(1)~(3)の順であった。質問紙の内容はすべての年齢で共通で, 文字の大きさや既習漢字に合わせてふりがなをつける等の調整をし, 小学生用, 中学生用, 成人用をそれぞれ作成した。

Table 1 各物語の内容

物語	提示文と質問内容
悲しみの泣き	仲のいい友だちが引っ越すことになり, 悲しくて泣いている人がいます。このように泣いている友だちがいたら, あなたはどうしますか?
達成の泣き	とてもがんばって練習してきたことがうまくできて, うれしくて泣いている人がいます。このように泣いている友だちがいたら, あなたはどうしますか?
再会の泣き	遠くにいてずっと会えなかった人とまた会えて, うれしくて泣いている人がいます。このように泣いている友だちがいたら, あなたはどうしますか?

Table 2 行動カテゴリの定義と回答数（括弧内は%）

カテゴリ	定義	代表例	悲しみ泣き	達成の泣き	再会の泣き
慰め・励まし	泣いている状態を落ち着かせよう、気持ちを変えさせようとする	「慰める」 「きっとまた会えるから大丈夫だよと言う」	132 (71.4%)	5 (2.7%)	5 (2.7%)
共感・称賛	泣いている他者の気持ちに言語的に共感したり、祝福したりする	「悲しいね」「よかったね」 「おめでとうと言う」	5 (2.7%)	151 (81.6%)	110 (59.5%)
表 出 的	一緒に泣く	泣いている他者と一緒に泣くことで非言語的に共感する	9 (4.9%)	9 (4.9%)	9 (4.9%)
	身体接触	泣いている他者の身体に触れる	14 (7.6%)	8 (4.3%)	5 (2.7%)
	寄り添い	自分から泣いている他者の近くに行き、言葉はかけずに寄り添う	7 (3.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他の表出的な行動	上記以外の行動	「声はかける」 「ごめんねと言う」	6 (3.2%)	6 (3.2%)	7 (3.9%)
非 表 出 的	見守り	泣いている他者のことを考えた上で、距離をとって関わらない	9 (4.9%)	4 (2.2%)	43 (23.2%)
	行動しない	泣いている他者には関与せず、行動を生起しない	3 (1.6%)	2 (1.1%)	6 (3.2%)

手続き

小・中学生には、まず各学校長に調査協力への同意を得た後、各クラス担任に実施マニュアルとともに質問紙を委託し、学級活動時間内にクラス単位で質問紙調査を行った。調査実施後、回答済みの質問紙を担任教員より回収した。成人には個別に質問紙を配布し、期日までに筆頭著者に提出するよう依頼した。いずれの場合も、質問紙の表紙に記載した調査内容と、倫理的配慮の説明を各自で読んでから回答するよう求めた。質問紙の回答の所要時間は約10分であった。小学生67部、中学生66部、成人62部の計195部を配布し、192部が回収された（回収率=98.5%）。また、統計的な分析にはSPSS 26.0を使用し、有意水準は5%とした。

符号化

参加者から得られた回答について、KJ法を用いて類似する回答をまとめた。なお、「しばらく見守って、そのあと声をかけに行く」のように回答に複数の行動が含まれる場合は、本研究では初発行動を優先し、最初に記述された行動（例：「しばらく見守る」）を回答として扱った。その結果、Table 2に示す8つの下位カテゴリが抽出された。泣いている他者に主に言語的な行動である「慰め・励まし」「共感・称賛」、非言語的な行動である「見守り」「寄り添い」「身体接触」「一緒に泣く」「行動しない」、そして前述以外の「その他の表出的な行動」であった。カテゴリ分類の客観性を確かめるため、参加者の約30%に当たる60名の回答について大学院生1名と筆者とのκ係数を算出したところ、κ=.83の一致率が得られた。

そして、山村・谷口（2012）や山村（2017）を参考に、8つの下位カテゴリのうち「慰め・励まし」「共感・称賛」「寄り添い」「身体接触」「一緒に泣く」「その他の表出的な行動」の6カテゴリを表出的行動、「見守り」「行動しない」の2カテゴリを非表出的行動の2つに分類した。

結果

泣いている他者への具体的な行動

泣きの物語ごとの各カテゴリの回答数と割合をTable 2の右部に示す。具体的な8つの行動カテゴリの回答数の違いを検討するため、物語ごとに一要因のχ<sup>2</sup>検定を行った。その結果、悲しみ泣きに対しては、他の行動カテゴリに比べて「慰め・励まし」が有意に多かった（χ<sup>2</sup>(7, N=185)=589.10, p<.001）。達成の泣きに対しては、他の行動カテゴリに比べて「共感・称賛」が有意に多かった（χ<sup>2</sup>(6, N=185)=686.29, p<.001）。再会の泣きに対しては、他の行動カテゴリに比べて「共感・称賛」そして「見守り」が有意に多かった（χ<sup>2</sup>(6, N=185)=350.97, p<.001）。

次に、物語による行動カテゴリの回答数の違いを検討するため、「物語」を参加者間要因として扱い、物語(3)×行動カテゴリ(8)のFisherの直接確率計算を行った。その結果、悲しみ泣きに対する「慰め・励まし」「身体接触」「寄り添い」が多く、達成の泣きに対する「共感・称賛」、再会の泣きに対する「共感・称賛」「見守り」が多かった（p<.001）。

続いて、物語・年齢群別の各行動カテゴリの回答数をTable 3に示す。年齢による各行動カテゴリの回答数の違いを検討するため、物語別に年齢群(3)×行動カテゴリ(8)のFisherの直接確率計算を行った。その結果、すべての物語で年齢による有意な違いがみられた。悲しみ泣きに対しては、小学4年生で「慰め・励まし」、中学1年生で「一緒に泣く」、成人で「身体接触」「寄り添い」「見守り」「行動しない」が有意に多かった（p<.001）。達成の泣きに対しては、小学4年生で「共感・称賛」、成人で「身体接触」「行動しない」が有意に多かった（p=.024）。再会の泣きに対しては、小学4年生と中学1年生で「共感・称賛」、成人で「見守り」「行動しない」が有意に多かった（p<.001）。

Table 3 年齢群別の各物語での行動カテゴリの回答数

		表出的行動					非表出的行動			全体	
		慰め・励まし	共感・称賛	寄り添い	身体接触	一緒に泣く	その他の表出的な行動	見守り	行動しない	表出的行動	非表出的行動
悲しみ泣き	小学4年生 (n=66)	62 (93.9%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	2 (3.0%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	66 (100.0%)	0 (0.0%)
	中学1年生 (n=63)	42 (66.7%)	3 (4.8%)	2 (3.2%)	2 (3.2%)	6 (9.5%)	5 (7.9%)	3 (4.8%)	0 (0.0%)	60 (95.2%)	3 (4.8%)
	成人 (n=56)	28 (50.0%)	1 (1.8%)	5 (8.9%)	10 (17.9%)	2 (3.6%)	1 (1.8%)	6 (10.7%)	3 (5.4%)	47 (83.9%)	9 (16.1%)
達成の泣き	小学4年生 (n=66)	2 (3.0%)	59 (89.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	3 (4.5%)	1 (1.5%)	0 (0.0%)	65 (98.5%)	1 (1.5%)
	中学1年生 (n=63)	2 (3.2%)	52 (82.5%)	0 (0.0%)	2 (3.2%)	3 (4.8%)	3 (4.8%)	1 (1.6%)	0 (0.0%)	62 (98.4%)	1 (1.6%)
	成人 (n=56)	1 (1.8%)	40 (71.4%)	0 (0.0%)	6 (10.7%)	5 (8.9%)	0 (0.0%)	2 (3.6%)	2 (3.6%)	52 (92.9%)	4 (7.1%)
再会の泣き	小学4年生 (n=66)	2 (3.0%)	51 (77.3%)	0 (0.0%)	1 (1.5%)	5 (7.6%)	3 (4.5%)	3 (4.5%)	1 (1.5%)	62 (93.9%)	4 (6.1%)
	中学1年生 (n=63)	2 (3.2%)	44 (69.8%)	0 (0.0%)	1 (1.6%)	2 (3.2%)	2 (3.2%)	12 (19.0%)	0 (0.0%)	51 (81.0%)	12 (19.0%)
	成人 (n=56)	1 (1.8%)	15 (26.8%)	0 (0.0%)	3 (5.4%)	2 (3.6%)	2 (3.6%)	28 (50.0%)	5 (8.9%)	23 (41.1%)	33 (58.9%)

注) 括弧内は各年齢の人数(n)を100%としたときの割合を示す。

泣いている他者に対する行動の表出の有無

各物語の表出的行動・非表出的行動の回答数の違いを検討するため、物語ごとに一要因の $\chi^2$ 検定を行った。悲しみ泣きに対しては、表出的行動が173回答(93.5%)、非表出的行動が12回答(6.5%)みられ、表出的行動が有意に多かった( $\chi^2(1, N=185)=140.11, p<.001$ )。達成の泣きに対しては、表出的行動が179回答(96.8%)、非表出的行動が6回答(3.2%)みられ、表出的行動が有意に多かった( $\chi^2(1, N=185)=161.78, p<.001$ )。再会の泣きに対しては、表出的行動が136回答(73.5%)、非表出的行動が49回答(26.5%)みられ、表出的行動が有意に多かった( $\chi^2(1, N=185)=40.91, p<.001$ )。

次に、悲しみ泣き(表出的行動=173, 非表出的行動=12)、達成の泣き(表出的行動=179, 非表出的行動=6)、再会の泣き(表出的行動=136, 非表出的行動=49)に対する行動の表出の違いを検討するため、「物語」を参加者間要因として扱い、物語(3)×表出(2: 表出的・非表出的)の $\chi^2$ 検定を行った。その結果、悲しみ泣き、達成の泣きに対する表出的行動が多く、再会の泣きに対する非表出的行動が有意に多かった( $\chi^2(2, N=555)=55.24, p<.001, Cramer's V=.32$ )。

そして、年齢による行動の表出の違いを検討するため、Table 3の全体欄の数値を用いて物語別に年齢群(3)×表出(2: 表出的・非表出的)のFisherの直接確率計算または $\chi^2$ 検定を行った。その結果、悲しみ泣き( $p<.001$ )、再会の泣き( $\chi^2(2, N=185)=46.20, p<.001, Cramer's V=.50$ )に対する行動の表出について年齢による有意な違いがみられた。悲しみ泣き、再会の泣きともに、4年生で表出的行動が多く、成人で非表出的行動が有意に多かった。達成の泣きに対する行動の表出には年齢による有意な違いはなかった( $p=.25$ )。

状況を通じた行動の一貫性

状況が異なる3つの泣きに対する行動について、個人内での一貫性あるいは変化を検討するため、3つの物語のすべてで同じ行動(例: すべて表出的行動)を回答した参加者を【一貫タイプ】、悲しみ泣きに対して表出的行動、ポジティブ情動による泣きに対して非表出的行動(例: 悲しみ泣きに対して表出的行動、再会の泣きに対して非表出的行動)を回答した参加者を【情動による変化タイプ】、その他の回答タイプを【その他タイプ】に分類した。各タイプの人数をTable 4に示す。

まず、どのタイプの人数が多いのかを検討するため、Table 4の全体欄を用いて一要因の $\chi^2$ 検定を行ったところ、【一貫タイプ】が有意に多かった( $\chi^2(2, N=185)=125.23, p<.001$ )。次に、年齢群によるタイプの違いを検討するため、年齢群(3)×タイプ(3)でFisherの直接確率計算を行った。その結果、年齢による有意な違いがみられ( $p<.001$ )、小学4年生で【一貫タイプ】が有意に多かった。一方で、成人で【情動による変化タイプ】が多く、【一貫タイプ】は少なかった。

Table 4 行動のタイプ別の人数(括弧内は%)

	一貫タイプ	情動による変化タイプ	その他タイプ	計
小学4年生 (n=66)	62 (93.9%)	4 (6.1%)	0 (0.0%)	66 (100.0%)
中学1年生 (n=63)	48 (76.2%)	12 (19.0%)	3 (4.8%)	63 (100.0%)
成人 (n=56)	21 (37.5%)	27 (48.2%)	8 (14.3%)	56 (100.0%)
全体 (N=185)	131 (70.8%)	43 (23.2%)	11 (5.9%)	185 (100.0%)

## 考 察

本研究では、小学4年生、中学1年生、成人への質問紙調査から、ポジティブな状況で泣いている他者に対する行動と、泣きの状況の違いにあわせて行動を変化させるようになる時期について検討した。

### ポジティブな状況の泣きに対する行動

具体的な行動について、悲しみ泣きに対しては「慰め・励まし」が多かった。一方、達成の泣きに対して「共感・称賛」、再会の泣きに対しては「共感・称賛」と「見守り」が多かった。また、全体で非表出的行動よりも表出的行動が多かったものの、状況による違いがみられ、他の状況に比べて再会の泣きでは非表出的行動が多かった。

ポジティブな理由による泣き（達成の泣きと再会の泣き）に対しては、「慰め・励まし」がほとんどみられず、「共感・称賛」が多かった。慰めや励ましは、「個人の不快感を軽減して、心理的状态を回復させることを目的に行われる」（小川, 2014, p.279）ものである。最も低年齢の小学4年生でも、ポジティブな情動によってもたらされている達成・再会の泣きに対しては、心理的状态を回復させるための「慰め・励まし」はその泣いている他者に対して必要な行動ではないと判断しているようである。

また、Hendrik et al. (2008) では検討されていなかったポジティブな理由で泣いている他者への非表出的行動は、再会の泣きに対して比較的多くみられた。この理由として、達成の泣きに比べて再会の泣きには「場の空気を壊す懸念」があったことが影響したと考えられる。満野・三浦 (2010) では、泣いている他者への非表出的行動の選択理由には、「関わることでネガティブな結果に繋がる」という懸念が関係していた。再会の泣きは「友達が会いたかった相手が傍にいる」という状況であり、自分の行動で「場の空気を壊す懸念」を持つことで、非表出的行動を行うことに繋がったのかもしれない。

### 他者が泣いている状況に合わせた行動の変化

具体的な行動については、Table 3 が示すように、小学4年生の7～9割の児童が、悲しみ泣きに対して「慰め・励まし」、達成の泣きと再会の泣きに対しては「共感・称賛」を行う傾向にあった。一方、中学1年生や成人は特定の行動のみを行う傾向が弱くなり、中学1年生では「一緒に泣く」、成人では「身体接触」「寄り添い」「見守り」「行動しない」などの行動の割合も高かった。また、成人は再会の泣きに対して非表出的行動を行う傾向が強かった。そして、個人内における行動のタイプについて、小学4年生の9割はいずれの泣きの状況であっても一貫して表出的行動を行った一方で、中学1年生・成人では一貫タイプの人数は少なくなった。

以上の結果から、小学生から成人にかけて、泣きの状況にあわせて行動が多様化していくようである。他者が泣いている状況は、その泣きをもたらした原因がポジティブかネガティブかに関わらず、直接的な行動（例：励ましや援助行動）を生起させやすい（Hendrik et al., 2008）。本研究では、若い参加者である小学4年生ほど

一貫して表出的行動を行っていた。このことから、泣きをもたらした原因に関わらず、泣きに対して直接的な行動をとりやすい傾向は、より幼い子どもほど強いといえよう。児童期後期は、向社会的行動の判断が「周りの人からみて良い行動か」といった基準から、「役割取得」や「行動の結果への配慮」を基準とする段階へ移行していく時期にあたる（Eisenberg, 1992/1995）。そのため、小学4年生では、いずれの状況の泣きに対しても周りの人が見てわかるような直接的な行動をとるべきだと判断し、一貫して表出的行動を行う参加者が多くなったと考えられる。

一方、成人は向社会的行動の判断において内在化された価値や基準が根拠に含まれる時期にあたる（Eisenberg, 1992/1995）。そのため、さまざまな状況の泣きに対する行動に個人の価値観も反映されるようになっていくことで、小学4年生に比べてさまざまな行動がみられるようになるとともに、泣きの状況にあわせて選択的に非表出的行動も行うことができたのであろう。また、本研究において小学4年生と成人の間にあたる中学1年生でも、成人には及ばないものの、複数の行動カテゴリがみられ、小学4年生に比べ選択的に非表出的行動を行う参加者も増加した。よって、中学生以降、向社会的行動の判断基準が変化していくにつれ、泣きの状況にあわせる成人の行動タイプに近づいていくと考えられる。

ただし、山村 (2017) では小学6年生の約4割が成人と同じ行動タイプを示したのに対し、本研究の中学1年生では、成人と同様の行動の使い分けをした参加者は19.0%であった。行動の判断には「自分だったらこうされたい」という志向性が少なからず影響している。小川 (2014) では、自分が落ち込んでいる状況で励ましや共感を受けた場合、中学生は成人以上に「感謝」の気持ちが強いことが示されている。本研究の中学1年生は「自分がポジティブな状況で泣いていたら共感してほしい」と考えており、その志向性が行動に影響した可能性がある。

### まとめと今後の展望

本研究では、ポジティブな理由によってもたらされた泣き（うれし泣き）であれば、慰めは必要ないと小学4年生でも判断していること、そして特に再会の泣きに対しては非表出的行動もみられることを明らかにした。また、成人では状況にあわせて表出的・非表出的な向社会的行動を使い分けしていることが示された。他者がポジティブな状況で泣いている場合は、泣きを見たヒトにポジティブ情動への共感的な行動を誘発すること、そして、状況の違いにあわせて行動には発達の違いがあることを示した点で意義があったと考える。

しかし、質問紙を用いた検討は、実際の泣きに対する行動を完全に反映できていないわけではない。また、本研究では一部の年齢段階の参加者を対象としているため、行動の使い分けが大学生で可能になるのか、中学1年生-大学生のいずれかの段階で生じるのかは明らかにできなかった。そのため、観察や他者評定の調査を実施するとともに、中学生-大学生の年齢区分を細かくした検討を行っていく必要があるだろう。

## 付 記

本研究は、平成28年度・修士論文（千葉大学大学院教育学研究科）のデータの一部を再分析し、修正・加筆を行ったものです。調査にご協力いただいた皆様、先生方に深く感謝申し上げます。

また、本研究は千葉大学グローバルプロミネント研究基幹・リーディング研究育成プログラムの助成を受けました。記して感謝いたします。

## 文 献

- Eisenberg, N. (1992). *The caring child*. Cambridge: Harvard University Press. (二宮 克美・首藤 敏元・宗方 比佐江 (訳) (1995). 思いやりのある子どもたち 一向社会的行動の発達心理 北大路書房)
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press. (菊池 章夫・二宮 克美 (訳) (1991). 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- Farver, J., & Branstetter, W. (1994). Preschoolers' prosocial responses to their peers' distress. *Developmental Psychology*, 30, 334-341.
- Hasson, O. (2009). Emotional tears as biological signals. *Evolutionary Psychology*, 7, 363-370.
- Hendriks, M. C. P., Croon, M. A., & Vingerhoest, A. J. J. M. (2008). Social reactions to adult crying: The help-soliciting function of tears. *Journal of Social Psychology*, 148, 22-41.
- 鹿子木 康弘 (2014). 発達早期における向社会性：その性質と変容 発達心理学研究, 25, 443-452.
- 加藤 真由子・大西 賢治・金澤 忠博・日野林 俊彦・南 徹弘 (2012). 2歳児による泣いている幼児への向社会的な反応：対人評価機能との関連性に注目して 発達心理学研究, 23, 12-22.
- 久保 ゆかり (2007). 幼児期における感情表出についての認識の発達—5歳から6歳への変化— 東洋大学社会学部紀要, 44, 89-105.
- 満野 史子・三浦 香苗 (2010). 大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 75-85.
- 溝川 藍 (2009). 幼児期における嘔泣きについての認識の発達 京都大学大学院教育学研究科紀要, 55, 117-129.
- 小川 翔大 (2014). 青年期における友人の慰め方が受け手の感情に与える影響：励ましや共感の言葉かけと何もせずそっと離れる行動の比較 発達心理学研究, 25, 279-290.
- 澤田 忠幸・松尾 浩一郎・橋本 巖 (2012). 成人期における“泣くこと”による心理的变化 心理学研究, 82, 514-522.
- Tomasello, M. (2009). *Why we cooperate*. MIT Press. (橋 彌 和秀 (訳) (2013). ヒトはなぜ協力するのか 勁草書房)
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2006). Altruistic helping in human infants and young chimpanzees. *Science*, 311, 1301-1303.
- 山村 麻予 (2013). 葛藤場面における「困窮者を援助しない」理由分類の試み：道徳判断水準からの検討 大阪大学教育学年報, 18, 21-36.
- 山村 麻予 (2017). 葛藤場面における向社会的行動方略の発達的变化—小学生と大学生の比較から— 人間環境学研究, 15, 9-15.
- 山村 麻予・中谷 素之 (2012). 児童が考える「思いやり」行動とはどのような行動か：小学生を対象にした自由記述調査から 大阪大学教育学年報, 17, 31-44.